

坪内稔典

言葉と遊ぶ

小学生の短歌をおもしろがっている。たとえば次のような歌だ。

・過疎の村三年生はぼくひとり学年トップ
でどんなもんだい！！ 田口 照

松山市立子規記念博物館の主催する「はがき歌」コンテストの応募歌だ。このコンテストの歌は誰かに送る（贈る）もの、引用歌の場合は「過疎の村へ」と詞書きがあるが、過疎の村もいいよ、ぼくを学年トップにしてくれて、と村への感謝を示したのだろう。自嘲の気分も少しあるかも。

・ありがとうおとのおはなしきくのすきこころにひびくにーにのピアノ
作者はおだわかさん、6歳。「コンクールでがんばったおにいちゃんへ」という詞書きがある。

この「はがき歌」コンテストは、正岡子規のいわゆるはがき歌にちなむもの、河野

裕子、天野祐吉の三人で審査していたが、今は二人が亡くなり、裕子さんの娘さんの永田紅さんなどが審査に加わっている。

実は、先の三人で審査するコンテストがもうひとつあった。宮崎県延岡市の「若山牧水青春短歌大賞」である。こちらも二人が他界、二人の後の審査に永田和宏、永田紅さんが加わって今も続いている。

・ちようちよがとんだひらひら花にとまっ
たひらひらびたんひらひらびたん
二年生の高木ゆうさんの作だが、オノマトペの言葉遊びがおもしろい。この言葉遊び、575777の定型が可能にしたと言っ
てよい。つまり、575777に合わせるために言葉を選んでい
るので。

右の二つのコンテストは、河野裕子さん
と天野祐吉さんが企画し、私が呼ばれたという感じのもの。三人に共通しているのはユーモア、つまり言葉を通してのびやかに心を開こうとすることだった。そのユーモアがことに冴えているというか、とても楽しいのが小学生の歌である。

私が引用した歌は、昔の俳諧歌、あるいは

は近世の狂歌に近いかもしれない。大人の短歌の本道からは逸れているという気がするが、「言葉で遊ぶ」という点において、そこらの大人の歌人よりもましかも。まじめに何かを表現しようとして、言葉で遊ぶべくなっている歌人がとても多い。

言葉で遊ぶ。これが短歌や俳句という定型詩の基本だと思う。定型で表現することが、まず遊び。遊びに心身をまかすことが、短歌や俳句を作る基本だろう。

というような考えに即して、私はこの二十年くらい、小学生といっしょに俳句を作ってきた。その実践のおおよそは『坪内稔典の俳句の授業』『小学生のための俳句入門』と言う本に書いている。短歌でなくて俳句で実践してきたのは、小学生にとつては5755のほうが親しみやすいから。言葉を積み木のようにして遊べるのだ。

教室で私は、「春の風ルンルンけんけんあんぼんたん」「三月の甘納豆のうふふふふ」「たんぼぼのぼぼのあたりが火事ですよ」などの自作をまず紹介する。それからみんなで5755の言葉と遊ぶ。十歳と七十五歳が言葉の同じ地平に立って遊ぶ。